

認知症 サポーター養成講座開く グループわが主催

ジョイラックデイの1月18日、グループわ 主催の「認知症について学ぶ」講座がカレッジ学習室で開かれ、61人が受講しました。この講座を受講した人は認知症サポーターと認められ、オレンジリングがもらえます。厚生労働省が主導の事業。サポーターは全国に約750万人(2016年6月現在)おり、地域で認知症の方が穏やかに生活するための見守りや環境整備に尽力しています。

講師はカレッジ職員で北区キャラバン・メイトの窪田和人さん=写真。パワーポイントで作成した資料をプロジェクターで大きなスクリーンに映しわかりやすく話しました。

◆講義の概要 認知症にはアルツハイマー型、脳



血管型などがある。脳の細胞が死に、その働きが悪くなって、生活する上で

支障が出る。中核症状は記憶障害。直前に起きたことも思い出せなくなる。筋道を立てた思考ができなくなり、時間や場所など自分が置かれている状況を認識できなくなる見当識障害もある。妄想を抱く、幻覚を見る、暴力をふるう、徘徊するなどの症状も出る。うつ、無気力などの感情障害を起こすこともある。

自分がどこにいるのか分からなくなった様子の人を見かけたら、相手の顔をしっかりと見て「一緒に帰りましょうか」などとゆっくり、はっきり、落ち着いて話しかけるのが望ましい。発症者は「自分はようになってしまうのだろう」と大変不安で、馬鹿にされているとも感じていて不満、不信がある。具体的には①赤ちゃん言葉を使わず、子ども扱いしない②認知症は自分もいつかかかるかもしれない③徘徊にも意味があり、ちょっと寄り道しているだけ④人生はいくつになっても悩む、迷うもの一と考えると、ゆったりと発症者に接することが大切だ。

講座を聞いた参加者は「ほのぼのとした中身だった。自分もサポーターとして動きたい」、「1回だけで終わらず、続編もやって欲しい」などと感想を述べていました。

(文・写真 広報 永野 知己)

弱い人を思いやる心が大切 熊本サポート隊報告会も開く

熊本サポート隊の報告会がジョイラックデイの1月18日午前10時からカレッジ学習室で開かれ、61人が参加しました。サポート隊の隊長である小畑理事長の挨拶の後、活動時のビデオをスクリーンに映して報告しました。2016年11月11日～13日に熊本県益城町の赤井、小池島田、安永、飯野小の仮設団地4箇所を訪問。住民と一緒に明石風たこ焼きを作り、一緒に食べながら和やかに歓談する様子がよくわかります。演芸が始まる前には派手な衣装をまとった三味線の波多野武郎さん、腹話術の田山映二さん、マジックの古後健一さんが仮設住宅を回り、懸命に呼び込みをしました。

住民は「たこ焼きをだし汁で食べるのは初めて。美味しか」とびっくりした様子。古後さんのマジックではネタを見破ろうと子ども達は身を乗り出して見つめますが、結局はわからず、「ウーン」と感心しきり。田山さんの腹話術の芸にも笑い転がっていました。民謡・三味線の波多野さん、蔵本公子さんが「おてもやん」「九州炭坑節」を唄い、住民も手拍子を打ち、踊りの輪を作りました。手話ソング・体操の橋本敏代さん、井上久美子さんが先生役でお手本を示し、住民もこれにあわせて体を動かし「気分



仮設住宅で熱心な呼び込み

が晴れ晴れした」と感謝していました。

ビデオ上映後、サポート隊員が感想を報告。①波多野さんは「ビデオは初めて撮った。下手くそですみません。130年住み続けた家が全壊した。ご先祖様に申し訳ないとの住民の話に胸が痛んだ」②井上さん「出発前に猛特訓した。材料のタコが無くなったら、住民が機転を利かしてチクワを持ってきてくれた。ありがたかった」③古後さん「神戸に帰って児童館でビデオを見せた。子どもらは真剣に見てくれた。困った人、弱い人を思いやる心が大切と改めて思った」。

(文・写真 広報 永野 知己)